虹の橋は渡れない

木蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虹の橋は渡れない

【Ｎコード】
Ｎ２８０２Ｌ

【作者名】
木蓮

【あらすじ】
ある事故に巻き込まれた２人。
こんな風に人を愛せたらいいな・・
虹の橋を渡ることは不可能だよね。

「おいコラ、何してんだよ。お前は！！」
病院で大声を出してはいけない。
あと、病室のドアを思いっきり閉めるのもいけないことだ。

「ビックリしたぁ、ちょっと手紙を取りに行っただけだよ。
今日は風が強くて飛ばされちゃったの！！」
ああ、それに、病人が勝手にベットから出てもいけない。
俺みたいに動揺する奴がいないとも限らないからだ。

「そんな事、自分ですんなよな」
俺は玄関からこっそり持ってきた花を花瓶にさした。
だから、今うちの玄関には花がない。
おそらく俺は、帰ったら母さんに殴り飛ばされるはずだ。

「えぇ、いいじゃんそのくらい」
果穂の笑った顔を見たのは久しぶりだった。
つい先日まで、面会謝絶だった奴だとは思えない。

「誰からの手紙なんだ？あ、これから出すやつか？」
俺はゴソゴソとカバンの中に手を入れていた。

「これから出すんだよ。あ、それよりさぁ、なんで芳ちゃんがここにいるの？」
おいおい！！
「見舞いに決まってんだろうが。あれ？わりぃ、メロン持ってきたはずだったんだけどな・・」
どこを探してもない。

家に置いて来たようだ。何をやってんだか俺は・・

「いいよ、それにメロンがそのカバンに入るはずないじゃん！」

あ、そうだ。どう見てもメロンが入るような大きさのカバンではない。

ホントに今日の俺はおかしい。

きっと、暑さのせいだ。

まだ、４月だっていうのに汗が吹き出してくる。

「あぁ、そうだな。ちょっとおかしいな俺」

そうだ、この頃の俺は何かおかしい。

頭にモヤがかかったみたいだ。

「芳ちゃんがおかしいのはいつものことじゃん。

ねぇ、写真のコンクールどうなったの？今年も出すんでしょ？」

え？あぁ、そうだ毎年俺は写真のコンクールに応募していた。

プロ、アマ、老若男女問わず応募出来るコンクールで俺は小学生のころ、賞をもらったことがあった。

そういえば、今年はいつあるんだっけか？

まだ、なんの準備もしていない。

「や、まだ何の準備もしてないんだ。」

「そうなんだ」

果穂が心配そうな顔をした。

「あ、でも応募はするって、そんな顔すんなよ」

果穂がまた笑った。

「ねぇ、写真撮ってよ。カメラ持ってるんでしょ？」
「イヤ、今日は持ってきてな・・」
手でカバンを探ると固い物のに触れた。
え？さっきは無かったような・・・

「撮ってよ！！芳ちゃんに撮ってもらうの久しぶりだし」
カバンを見ると、愛用のデジタルカメラが入っていた。
あれ？気のせいだったんだよな。きっと、俺はどうかしてたんだ。
「あぁ、いいよ。なんだよ。その馬鹿面！！」
俺は、笑っていた。
果穂を撮るのが、本当に久しぶりの様な気がした。

「お、虹が出てる」
「うそ！！」
果穂は嬉しそうな声で窓を振り返った。
窓の外にはくっきりとした虹があった。
「わぁ、ほんとだぁ。よし、虹をバックにもう一枚！！」
「あまり、はしゃぐなよな」
俺は、果穂と虹の写真を撮った。

「あぁ、楽しい！！芳ちゃんといるとホントに楽しい」
果穂は嬉しそうな顔で俺の顔をみた。
「それはなにより」
俺も笑いながら、今撮った写真を確かめた。

あれ・・・・？
今撮った写真が一枚も残っていない。
だが・・・

最後の写真は虹の写真になっていた。
くっきりとした虹の。
どういうことだ？

突然、果穂が言った。
「芳ちゃん、もうそろそろ思い出してよ。」
果穂が俺の方も向いていた。とても悲しそうな顔で。

「何をだ？」
声が震えているのが自分でも分かった。

「あの事故のことだよ。４月に行った海での帰りにあった事故」
果穂は、窓の方を見た。

「あの日も、こんな虹が出てたよね。とっても綺麗だった。
トラックがぶつかってきた時はスッゴク怖かった・・・
そうでしょ？」
果穂は涙声になっていた。

その声を聞いた瞬間
今まで頭にかかっていたモヤがなくなった。

あ、あ・・・そうか。
思い出した。
俺達はあの時死んだんだ・・
あの、事故でさ。あの時も綺麗でくっきりとした虹が出ていた。
４月のあの日に、果穂と２人で海に行った帰り道だよな。
俺達が乗っていたバイクに、トラックがつっこんできて・・・

綺麗な虹だなって、あの海で写真を撮ったんだ。
そうか、そうだよ。

なんでいままで忘れてたんだよ。
俺は、あの時死んで・・・

「違うよ。芳ちゃん」
果穂が微笑んでいた。とても優しい顔。

「芳ちゃんは死んでなんかいない。死んだのは私だけだよ。」
おい・・・何言ってんだよ。
俺も死んだんだよ。

「芳ちゃんは、生きてるよ」
ハッキリとした口調だった。
「俺がお前を・・果穂だけ死なせるはずないだろ?俺も死んだんだよ!!」
俺は、叫んでいた

「芳ちゃん、しっかりして。死んだのは私だけ。
芳ちゃんはちゃんと生きてるの。
でも、芳ちゃんは生きてるのに死んでるみたい」
果穂が笑った。

「芳ちゃんって本当に私のこと好きだったんだね!!
あの事故からもう、4ヶ月経つんだよ。
あのに、芳ちゃんまだくよくよ私のこと考えて、後悔して・・・
私が、芳ちゃんのこと恨むはずなんてないじゃん!!

私は、死んだことに後悔がない訳じゃないけど、でも、幸せだったからこれでもいいと思ってるよ。
最後に、芳ちゃんに写真も撮ってもらったしね」
クスクスと果穂が笑った。

「果穂・・・ごめんな」
俺は言葉が見つからなかった。
果穂だけが死んで俺が助かったときも・・・
どうすればいいのか分からなかった。
果穂がいない世界なんて考えられなかった。
他の事なんてどうでもいいと思っていた。

「もう、ちゃんとしてよね！
コンクールは来月の１７日だよ。
覚えて置いてね。
さて、そろそろお別れかなぁ・・」
寂しそうな声だった。

「果穂・・今までありがとう。
ほんとに・・・ありがとう・・・
俺頑張るから。
死んでまで、俺の心配させるような事もうしないから」

「ほんとかなぁ？
クスクス。バイバイ芳ちゃん。大好きだよ」

目が覚めるとそこは俺の部屋だった。
何日掃除してないのか分からないようなくらい、散らかっていた。
あぁ、これじゃあ果穂が心配するはずだよな。
カレンダーは４月のままだった。

うなるような暑さだった。
俺はカーテンのされた薄暗いこの部屋を飛び出した。

そうだ、メロンと花を買いに行こう。
靴を履きながらそう思った。
ふと、玄関と見るといつも飾られているはずの花がなく
花瓶の下に、封筒が一つ置かれていた。

帰ったら、あの封筒を開けてみよう。
もしかしたら、果穂から来た手紙かもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2802l/

虹の橋は渡れない

2011年1月16日01時19分発行